



【朝さろん】 77th morning

『東京プリズン』 赤坂真理

2018年2月12日(月・祝)@渋谷
参加者:10名、芹沢(進行)

朝さろんは、**参加者全員**で、

- 1、作品を通り一遍の理解から解放し、わかった気にならず、むしろどこまでも“わからない”という疑問をたいせつにしながら、ていねいに鑑賞し、対話する協同の営みです。
- 2、作品に即してじっくりと部分(ディテール)と全体を行ったり来たりしながら、作品内部に設けられている空白を埋めていき、作品が内部に抱えている本質を浮かび上がらせることを第一にしています。
- 3、作品を読んで触発された問いや疑問、作品を離れての思考も大歓迎ですが、“その問いはこの作品だからこそか?(作品の本質に即した展開や発展的な問いか?)”という結び目だけは、それなりに重視したいとおもいます。

そのため、以下の**心がまえ**をご確認ください。



- a) 対話をする相手(参加者、テーマ、作品)にたいして敬意をもつ
- b) ひとの話は最後までしっかりと聴く
- c) 自分のことばで、なるべく簡潔に、意見を述べる
- d) よくわからないことや違和感などに、「わからない」と態度を示す。なるべく自然体でのぞむ
- e) 意見の批判は◎、相手の人格を攻撃することは× これを峻別する
意見(発言)は問いを深めるための“目印し”。その批判は決して人格攻撃ではない

* ≪ 正論(意見)ってのはあくまでも自分という潜水艦の周囲の状況を確認するために発信するソナーなんだよ。自分が正しいと感じる、信じる意見をポーンと打って、返ってくる反響で地形を調べるのだ。ソナーで道が拓けるわけじゃない。≫ (「ビッチマグネット」舞城王太郎、2009)

- f) 発言や意見・態度の表明は強制しない/されない

このような心がまえで読書会に臨むと、**副次的なものとして**こんな態度が身につくかもしれません

- 自分の考えが変わるということを、体験を通じて受け入れることができる
(自己変容の可能性)
- 間違ってもいいんだという体験を、安心安全な場所で得ることができる
(可謬性の獲得)
- 他者の気持ちや視点に立って考えを組み立てることができる
(立場の入れ替え、他者への想像的な同一化)
- 問いを深める思考力を養うことができる
(探求能力の涵養)
- ひとりではなく集団での対話や議論に協調できる
(共通了解志向型の態度の獲得)

【問い】

1)、本書を読んだ感想、気になった箇所、話し合いたい箇所などをおしえてください。【感想】

(くらち さんからの感想)

・序盤の方は主人公と母親が同化して一体になっている印象があり、それに嫌悪感がありました。が、後半になると天皇も一体化して(イタコみたいに自分の中におろす？感じ)きたので、嫌悪を通りこして発想がすごいなと思いました。

・ディベートの場面はサクサク読めるのですが、「大君」が出てくる場面になると、ものすごく読みづらかったです。その場面が面白かったという方がいたら、どのあたりが魅力か感想を聞いてみたいです。

・私は小学生の頃から歴史が好きで、大抵歴史の教科書が最後までたどり着かない(もしくは終盤スピードダッシュで終わる)のを気にしていたので、その話題が出てきたのがうれしかったです。

<私の興味関心>

今は「日本人の語れなさ・語れないこと」についてもっと考えたいと思っています。

2)、1)で全員の興味関心をシェアし、そこからピックを立てて話し合います。【解釈・読解】

3)、本書だけが表現している(と思われる)本質的な魅力や固有の価値はどこにあるでしょうか。本書を読んで感じた”自由”に関する事柄はどんなことですか？【発展】

【テーマ】〈限局性激痛〉

”限局性激痛”——それは身体部位(胸の奥)を襲う限局性の激しく鋭い痛み、苦しみ。

本来”痛み”はどこまでも個人的なものです。わたしの虫歯が痛んでも、ふつつこれを読んでいるあなたには伝わりませんよね。

でも、多くのひとは、その”痛み”に対して想いを寄せることができます。さして苦勞せずとも「だいじょうぶ？」といったわったり、「苦しかったでしょうね」と気遣ったりすることができるのです。誰かの痛みを、まるで自分の”痛み”でもあるかのように感じられる能力——共感、想像、同一化——それは人間を人間たらしめているものの一つかもしれません。

その人にしか実感できない痛覚・痛みの体験を、フィクションな文学作品を読むことをとおして単に追体験するのではなく、”痛み”がもたらされる環境/要因/困難を構造的に理解し、想像的な同一化をはかることで、より深い視野に収めることができる。——表面的な痛みの表明に留まらない、そういう力強さを備えた作品が今シーズンは揃っています。

状況も悩みもまったく異なる三つの物語で描かれるそれぞれの”痛み”——〈限局性激痛〉に寄り添いながら、なにをどこまで共感できるのか、あるいはできないのかということなんかも試してみたいと思います。

安易に共感するよりは、無神経でいる方がよっぽど誠実で、そして難しい。そんなシチュエーションもなかにはあつたりするかもしれません。読むのがラクな作品とは限りませんが、痛みの深遠を直視する度胸があると、新しい世界が拓けて見えることでしょう。ぜひ一緒にください。

【本】

『東京プリズン』 赤坂真理

単行本：『東京プリズン』（河出書房新社、2012年7月）

文庫本：『東京プリズン』（河出文庫、2014年7月）



【 Story 】

日本の学校になじめずアメリカの高校に留学したマリ。だが今度は文化の違いに悩まされ、落ちこぼれる。そんなマリに、進級をかけたディベートが課される。それは日本人を代表して「天皇の戦争責任」について弁明するというものだった。

16歳の少女がたった一人で挑んだ現代の「東京裁判」を描き、今なお続く日本の「戦後」に迫る、日本発の世界文学。

15歳の「マリ・アカサカ」は1980年、一人で米国に留学した。メイン州の小さな町にある高校で勉強しているうちに、日本についての無知に気づき、自分の国についていろいろ調べるようになった。そんなある日、学校で「天皇の戦争責任」という題のディベートに参加したが、大きな壁にぶつかる。答えが見つからない中、マリは時空を超えて40代になったマリに電話し、あるいは海を越えて、戦争を経験した祖母に聞いたりした。過去と現在、米国と日本、幻想と現実の間を行き来しているうちに、少女マリは米国との戦争や戦後の歴史を少しずつ知るようになる。自信を持って最後のディベートに臨むとき、彼女はもはや勝敗に興味はない。もっと大事なことに気づいたからだ。

40代半ばの女性が10代の少女の分身になるという設定には深い意味が込められている。10代の少女にとって敗戦は遠い過去だが、40代のマリも戦後の生まれであり、戦争を体験したわけではない。しかし、いまも世代を超えて「あの戦争はいったい何だったのか」という答えのない問いかけが日本人の前に横たわっている。

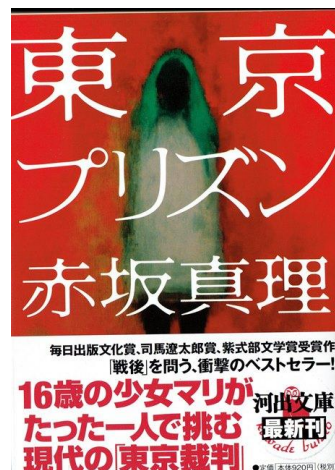
太平洋戦争について、戦時中には戦争小説があったし、戦後には反戦小説が登場したが、この小説はそのどちらとも違う。過去の事実を題材とする歴史小説とも一線を画している。誰も試みたことのない手法で、大東亜戦争を扱うという点では文学的冒険といえよう。この未曾有の冒険を見事に成功に導いたのは、作家一流の語りと独創的な作品構成である。

【赤坂真理（あかさか まり）】

1964年5月13日ー)は小説家、評論家。東京都杉並区高円寺出身。吉祥女子高等学校、慶應義塾大学法学部政治学科卒業。ボンテージファッションと思想の雑誌「SALE2(セール・セカンド)」の編集長をつとめる。

1995年「起爆者」で小説家デビュー。1999年『ヴァイブレイタ』が第120回芥川賞(1998年下半期)の候補となる。2000年『ミューズ』が第122回芥川賞(1999年下半期)の候補となる。『ミューズ』で第22回野間文芸新人賞受賞。2003年、『ヴァイブレイタ』が映画化。2012年『東京プリズン』により第66回毎日出版文化賞、第16回司馬遼太郎賞受賞。2013年、同作により第23回紫式部文学賞受賞。

評論に、『モテたい理由 男の受難・女の業』(2007年、講談社現代新書)、『愛と暴力の戦後とその後』(2014年、講談社現代新書)、『日本の反知性主義』(2015年、内田樹・高橋源一郎ほか共著、晶文社)等がある。



書評:いとうせいこう [掲載]朝日新聞 2012年07月15日

■忘却された歴史、文学でとらえる

「文芸」連載当時から圧倒的な異彩を放っていた『東京プリズン』が大著としてまとめ、その水準の高い仕掛けの緻密(ちみつ)さ、重みの全貌(ぜんぼう)をこの世にあらわした。

エピグラフにはこうある。

「私の家には、何か隠されたことがある。そう思っていた」

隠されたことのひとつは、現在40代半ばを迎えた主人公、女性作家の過去であり、例えば思春期に米国東海岸に突然留学させられた理由が、母から明瞭に語られてこなかった事実への疑問である。

そしてもうひとつは、日本という“家”が戦後、自らどのようにして戦争責任をとらえたのか、あるいはなぜ問題点を忘却したまま経済的な繁栄だけを目指して復興し、やがてバブルを迎えて不況に至りながら、今なお精神的な支柱を失っているのか、だ。

個人史と世界史の双方を緊密なひとつの物語として語ってみせるために、著者は小説ならではの機能を惜しみなく用いる。

そのひとつが時を超えてつながる電話であり、時には1980年のメイン州にいる15歳の「私」が、離婚などを体験して今は一人で生活している2009年の「私」にコレクコールをしてくる。過去の自分と向き合う「私」はあくまで彼女の母を装う。つまり自分の母を演じることで、やがて主人公は少女時代の「私」を通して母を理解していくことにもなるだろう。

他にも「私」は様々な幻視をする。実際の母親に電話をしながら母しか知らない過去に入り込む。そのSF的な仕掛けによって、主人公は母が東京裁判の資料翻訳をしていた時の様子を“知る”。

一方で米国に留学させられている過去の「私」は、授業の一環として「天皇の戦争責任」をディベートしなければならなくなる。周囲にほぼアメリカ人しかいない状況で、少女は天皇とは何かを自分の言葉で言わなければならない。

ただし、窮地に陥った少女の「私」は一人ではない。幻視の力で出会う人々がおり、何よりも母親の証言を得て人生の理解を進めつつある現在の「私」とつながっている。これこそが文学でしかなし得ない歴史のとらえ方である。

ラストに行われる少女の「私」による壮絶な大演説は、天皇論、文明論の核心に触れ、敗戦によって日本が失うべきではなかったと「私」が考えることを強く訴える。

その「私」の中には過去と現在の自分だけでなく、「すべての、声なき人びと」が含まれる。いわば「私」は彼ら“英霊”の通訳となって言葉をほとばしらせるのだが、その時同時に「私」はかつて東京裁判で翻訳をした母の身体を逆向きに経験してもいるはずだ。

これは世界文学である。今すぐ各国語に翻訳して欲しい。

川村湊氏 今年の5冊

「赤坂作品も、個人史(家族史)の背景にある歴史との葛藤を力強く作品化して、作家の代表作とってよいものとなった。戦争責任の問題は決して古びていない。時間と空間は、多次的なものであることも、この小説は示している。」

重里徹也氏 今年の5冊

「戦後の日本とは何だったのか。ヒリヒリする身体感覚が持ち味の赤坂が、自身の体を張って、天皇の戦争責任や戦後の日米関係を問いかける。今年、最も鮮やかな「蛮勇」だった。」

棚部秀行氏 今年の5冊

「一番の話題作の赤坂作品は、1964年生まれの著者が、戦争から今に地続きとなる新たな物語を提示した。公私を引き合わせ、戦後日本のゆがみを問うた大きな成果であったと思う。」



第 66 回毎日出版文化賞受賞〈文学・芸術部門〉

[選評] 現代史の深部に挑んだ力作 松浦寿輝氏

1980 年、日本の中学を卒業してアメリカの小さな町の高校に留学した少女が、日本を「かつての敵国」と呼ぶ人々に囲まれつつ、「天皇の戦争責任」という厄介なテーマを論じることを強いられる。赤坂真理「東京プリズン」は、この小さな挿話から出発し、わが国の現代史の深部にまだなまなましく疼いている外傷体験に真っ向から立ち向かった、気宇壮大な力作である。

孤立無援の少女が途方に暮れて故国に国際電話を掛けると、そこはいきなり 2009 年の日本で、電話に出るのはかつての母親の年齢になった自分自身なのだ。戦争責任の問題を曖昧にしたまま、バブルとその崩壊を経て、やがては大震災も起こる平成日本の現在までもが、この作品に取り込まれ、分厚い虚構の時空を形成している。

文学は、しなやかで強靱な想像力によって、政治学や社会学の論文とはまったく違う形で「国家」を論じ、「歴史」を問題化するのだ。小説という形式が内にはらむ豊かな可能性をまざまざと示してくれた、近来稀な傑作長篇と思う。

第 16 回司馬遼太郎賞受賞 [贈賞理由]

主人公である女性作家のアメリカ留学の心の傷を、日本の戦争における天皇の責任を問う形で問うた意欲作。現代の若い世代が「天皇の戦争責任」というタブーをアメリカのディベートという文化にたじろぎつつ、その言語空間を使って、みごとに作品化した。

日本記者クラブ

「語られなかった戦後の根源を探る

天皇、女性、アメリカ、暴力、団地、学校をつなぐ視点

▼シリーズ企画「戦後 70 年 語る・問う」①

赤坂真理・作家、原武史・明治学院大学教授

<https://s3-us-west-2.amazonaws.com/jnpc-prd-public-oregon/files/2014/09/ba47d7435933685351804082693218eb.pdf>

『私(赤坂真理)は戦後民主主義教育の暴力性みたいなものを『愛と暴力の戦後とその後』という本に込めたんですけども、戦後民主主義教育はもちろん平和憲法を護持して、平和を旗印として、というもんだったんだけど、それが暴力を封じたがゆえに暴力的だったという体感を私は持っていて、でもそれはとても言いにくい。政治的に言いにくく、言語化もしにくいところでした。』

今シーズン / テーマ 〈限局性激痛〉

▼ #77 2/12(祝・月) 『東京プリズン』 赤坂真理

※ #76 1/20(土) ⇒ 2/24(土) 『青い眼がほしい』 トニ・モリスン

▼ #78 3/4(日) 『侍女の物語』 マーガレット・アトウッド

次シーズンの予定 / テーマ 〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

▼#79 4/8(日) 『(選定中)』 —

▼#80 5/12(日) 『(選定中)』 —

▼#81 6/10(日) 『(選定中)』 —

【原則、毎月第2日曜の AM に開催】

〈辰木目〉

- 粗筋を「読んた」Ep 家と異なる (日英制、母の入れ替り)
- 翻訳 (日本語/English) を介して知覚されるもの
- 母-天皇-人民, 男と女 要素がものすごく多い。(注かせるのか?)
- p352 ~ 「新しい神話, 新しい契約」
- p354 ~ 「過去の痛みをどうするの?」
- 神々の話がピンとこない。
- 予備知識のないマリがいろいろ読んで、過程を体験することで自分自身の考えがゆらぐ(興味で)。
- ハラジカニ キリストのメソフ (?) (犠牲, 受肉)
- ムズカしい。(特に詩的な短文で) 量りかたがとて

曼陀羅/絵巻き 戦後 マリの痛みは? 神 母と娘 翻訳 天皇の皇子親 東京裁判

日本 日本語 東京裁判
 U.S. English High School Diva

1980年代 15~16才
 2010年代 45才

PS15 天皇の再定義ってあんの?

父、スライム(父) 戦後 マリの痛みは? 神 母と娘 翻訳 天皇の皇子親 東京裁判

大衆 因=不和 父=不在 (喪失) マリ母 通訳

小説の創作法 歴史的 文化的 個人的

1945 47 GHQ サンフランシスコ 平和条約

1980年代 父が死ぬ 15~16才
 2010年代 45才

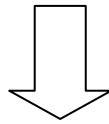
1950 2000 2010

個人的 PTSD



開始時の感想：

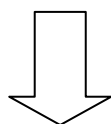
- ・あらずじに書かれていたことと、読後の印象がかなり違っていた。
- ・たとえば憲法の内容についてなど、既知の日本語法文と、英語への翻訳を介して見たときとはかなり印象が異なっていて、驚きだった。翻訳を介してはじめて知覚されるものがある。
- ・母-天皇-人民というつながり(連なり)がいまいちアタマでは掴みにくかった。ヘラジカやシャム双生児はじめ、そういう意味がありそうだけど、すぐにピンと掴みきれない要素が非常に多い。
- ・予備知識を持たないマリがいろいろ知っていく過程を読者が追体験するので、すでにじぶんが知っていると思っていた事柄についても「へえそうなんだ」という気づきがあった。
- ・ヘラジカはキリストのメタファーなのか？ キリストと天皇(大君)はどう関連するのか？
- ・“リトルピープル”というのは『1Q84』(村上春樹)にも出てきたが、正確に意味を汲み取るのが難しい。
- ・詩的なイメージ、詩的な短い文章の積み重ねでたたみかけてくる箇所が何度か出てきて、そこで意味をとらえるのが難しかった。
- ・天皇の戦争責任、東京裁判というテーマと、「母と娘(の不和)」というのがどんな風につながっているのか、もうひとつピンと来なかった。
- ・戦争や戦争犯罪、日本の思想的水脈みたいなことが、こんな風に語られているのは新鮮だった。



作品の解釈：

- ・2010年45歳の現在の「マリ」が、1980年16歳当時のじぶん自身(「マリ」)が抱えていた苦しみ(ヤトラウマ？のような体験)に再び向き合い、16歳のじぶん(「マリ」)が本当に望んでいた対応を小説的な語り直しとして提供することを試みている作品。それを通じて2010年現在のじぶん(「マリ」)がひきずったままになっている過去の痛みに向き合い、鎮静化させるようなことを意図していると推察される。
- ・1980年のマリにとっての懸案は「異国の地にひとりで送られたこと(孤独)」、その背景に潜む「母と娘の関係の不和」であり、現地での「文化的な摩擦」と考えられる。このあたりは作中で語られる「マリの個人史(ライフヒストリー)」部分から推測できる。
- ・「母と娘」という軸が最も根源的な問題であるはずの本書において、1945年の終戦(敗戦)やそれに続く東京裁判という歴史的なテーマがマリの前に浮上してくる不可避的な背景、あるいは必然性がどんなところにあったか？ 【母と娘】というラインに沿って再検証していく。
- ・一つは、ハイスクールでのディベート課題(天皇の戦争責任)として強制されている点(外的な要因)
- ・もう一つが、「マリの母の個人史(ライフヒストリー)」に関係してきてしまう点(内的な要因)
- ・1945年の終戦～東京裁判において、マリの母は裁判関係資料の翻訳(下訳？)の仕事をしていた。しかも連合側の仕事に従事していた。つまり日本人でありながら、戦勝国側が勝者の勝手さでもって同朋を裁くという歴史的なシーンに、連合側立場から関わっていた、という背景がある——①
- ・この時代、母も、アメリカ兵が敗戦国の、黄色人種の、パンパン(売春婦)に対するような酷い扱いを受けていた可能性は否定できない。むしろ、1980年代のアメリカのハイスクール以上に、差別的・排他的な環境の中で仕事に従事していたのではないか。しかもその仕事が戦勝国側の理に組するものであり、環境や身体への支配のみならず、言ってみれば精神面でも連合国側に被支配されていたようなものであったかもしれない、という可能性——②

- ・祖母が「母はつらいとも言えなかった」的なことを指摘しているように、母は翻訳(あちらのコバをこちらのコバに移す)という作業に従事し、自らの声を(ほとんど)挙げなかった。連合側によって母の個人的な声(意見・考え)は奪われていた、と見ることもできる。——③
- ・1980年代のマリは、ディベートのための勉強をしたり、2010年代のマリと交流などをしていくなかで、①②③のような「母もじぶんと同じような(あるいはそれ以上の)苦勞をしていた」という想像をすることができるようになっていく。マリの痛みは母の痛みでもあり、母が痛みを抱えていたからこそ、マリもまたその痛みから逃れることができなかつたということを知ることになる。
「母の痛みと、マリの痛み」。それをつなぐのが戦後の日本民主主義が覆ってきたものであり、戦後のあの瞬間にきちんと問われなければいけなかつた問題であり、あそこで口を噤んだ(噤まされた／その後も噤み続けてきてしまった)という過ちに起因する弱さ。脆弱性。欺瞞性。
- ・マリはディベートに負けることを厭わず、それ以上に「いうべきことをいう」「非は認める」「しかし相手の非もまた、恐れずに問い続ける」という一貫した姿勢を貫く。その過程で翻訳や通訳という言葉の壁を越えていくことのむずかしさも体験し、そこに学び、母の苦しみも追体験していく。日本の高校に進学できない状況になったマリが「アメリカのハイスクール」に送られた理由が、母の経験した環境の再現として、ここで意味づけられていく。
- ・2010年代のマリにとって、1980年代のハイスクールでの経験が大きな挫折と苦しみになっている。そこを見つめなおし、あの時どうすることが最善だったのかを自問自答するうちに、マリひとりの問題に留まらず、母や母の人生や、ひいては日本の歴史全体への問いなおしという巨大な視座を獲得していく。その視座の獲得には、戦勝国アメリカでの多数派の歴史認識の前にひとり立たされている孤独な10代の少女の挫折がある。
しかしこの挫折は動かし難い事実である。この痛みを打ち勝つためには、歴史認識(とアメリカナイズされた日本文化、経済的繁栄)にまで踏み込むような巨大な視野に立った包括的な論旨が必要だと(すくなくとも本作の語り手が)考えるほどに深い挫折、根源的な挫折だということが示されている。



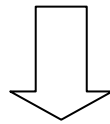
終了時の感想:

- ・天皇の戦争責任や東京裁判、というような事柄はあまりにも大きすぎるテーマだし、なかなかふだんのじぶん自身の身近にある問題だとは実感できないことなのですが、だからといって「じゃあ勉強しなきゃ」というような強制感でもなく、こんな風に覚束ないながらも(じぶんの言葉で)話せてよかったなと思いました。
- ・作中でGHQや東京裁判資料の翻訳をしていたのはマリの母だったが、現実の作家の伝記では、翻訳の仕事に従事していたのが母ではなく父だということを知って興味深かった。父から母への改変によって、この物語の構成にどんな意味をもたらされているのか——という視点でもう一度考えてみたいと思った。
- ・主人公のマリが痛みを抱えているというのはよくわかるが、それがいったいどんな痛みなのかはうまく言えない。わかりづらい。まだ読みこめていないのかなとも思う。
- ・作中では父がバブルの上り坂の87年に死んだと呆気なく書かれて済まされているが、父の不在をマリがどんな風に感じていたのか、気になった。一回整理しないといけないなと思う。
- ・15歳のマリが45歳のマリに電話をかけるが、あくまで45歳のマリが想像(回想)する母を演じているという構成で、マリの実際の母が前面に出てきているわけではない。あくまで15歳と45歳の「マリ」というひとりの人物の中にすべてのキャラクタや事象が流れ込んできている、という構成。そこを



もう一回整理したい。

- ・「自分の過ちを認めつつ、他人の過ちを問い続ける」(p526)という一節が印象的だった。日本国憲法の制定過程(アメリカからのお仕着せ憲法、という見解)や、東京裁判の無法ぶり(事後法で裁く、日本は侵略していない etc)などさまざまな意見が交差するテーマではあるが、冷静に、どこまでも真剣に向き合って学び続ける姿勢は不可欠。「自分の過ちを認めつつ、他人の過ちを問い続ける」という一節はそこに響いた。
- ・半藤一利や加藤陽子の本などをもう一回読み直したい。そして、大勢に読んでほしい。
- ・祖父母は戦争経験者で、なにかしら話を聞くこともできる/できたんだろうと痛感した。戦争を知らない世代、だけど、戦争も含めた大きな歴史的な文脈の上に乗っている(降りられない)という点を感じることができた。
- ・冒頭に出てきたヘラジカがここまで大きなメタファーになってくるとは思わなかった。オス鹿らしい立派な角のわりに男性器が見当たらない描写など、両性具有(中性的)な雰囲気でもあり、男系天皇と、女性的な大君の両方のイメージを兼ね備えていてすごいなと思った。
- ・アンソニーの歴史観からも学ぶことが多かった。
- ・A、B、C 級戦犯の意味を知らなかった。A 級戦犯は罪が最も重い人、だと思っていた。
- ・なかなか俯瞰しにくい「歴史」と「個人史」の両方を等価に、等分に、しかも意味を持って接続させ(しかも自在に物語る)見方をこの作品から教わったように思う。



ちいさなまとめ;

- ・マリが抱えている痛み。その痛みの根源はどこか。
どこだという風に(読者である(私)は)指摘するか(できるか)。読者にそれが要求される小説。
- ・痛みの元とは根源的な原因であり、指摘するにはその患部を言語化することが必要になる。そのためにはマリが辿った道を同じように辿りながら、限局性のその痛みを自分の言葉で表現し直すことが大事になる。
- ・「天皇の戦争責任は〇〇だ」「戦後民主主義のここがおかしい」「憲法は〇〇だ」という歴史的/政治的な重要問題事項への理解を単に深める、という決着ではなく、ひとりの少女の痛みを中心に沿って見ていくことで、これらの歴史事項が「誰かの、本当の痛み、実際の苦しみになっている」ということを押さえておきたい。それはたぶん、善し悪しや正誤の以前の問題。
- ・痛みに寄り添うことで、歴史的なテーマに違った道から向き合うこと(も)できる可能性を示されている。
- ・限局性激痛に耳を澄ませ、心を砕くことを通じてのみ、知覚できることも、中にはあるのかもしれない。じぶんとは異なる誰かの眼や手や耳を借りて、世界を見つめ直す経験。あたらしい手触り。の一端。

以上